

# 平

成26年度、全国の動物愛護センターなど（以下「センター」）で殺処分された犬と猫の数は、10万1338頭。

多くのセンターでは、処分機と呼ばれる箱の中に炭酸ガスを注入し窒息死させる方法で、犬と猫を殺処分しています。

殺処分となるのは、捕獲された野良犬や捨てられた子猫、飼い主が不明の迷子犬、飼い主から持ち込まれた飼い犬・猫などです。

当然ですが、殺処分をしているセンターは、望んで殺処分をしているわけではありません。

しかし、全国のセンターで引き取られる犬と猫の数は年間約15万頭。

限られたスペースと予算、そして人手不足の中、次々と持ち込まれる犬と猫。各センターは殺処分という選択肢を取らざるを得ません。

誰にも引き取られない犬と猫がたどり着く、「殺処分」という現実。この悲しい現実を引き起こしている要因は、どこにあるのでしょうか。

## 安楽死なんかじゃない 殺処分の現場

※本項目には動物の死に関する描写がありますのでご注意ください。  
※内容はフィクションですが、実際の殺処分の現場を忠実に再現したものです。

### と

ある動物愛護センター。鉄格子に囲まれた収容所で、殺処分される犬たちはその時を待つ。これからの運命を悟っているのか静かに座る犬。こちらを視認すると激しく吠える犬。怯えるように逃げる犬。人懐っこくしっぽを振り近寄ってくる犬。その様子は多種多様だ。

この施設の殺処分の日は毎週火・木曜日。時間が来ると、鉄格子の扉が開けられ、犬たちは細長い通路に出される。通路の一方には「追込機」と書かれた壁。もう一方には扉が開いた銀色に光るステンレス製の箱。すべての犬が通路に出されると、機械音とともに「追込機」が犬たちに向かって動き出す。迫ってくる壁に犬たちはなすすべがなく、ステンレス製の箱——「処分機」に自分の足で入っていく。